展評

町田 恵美

永津禎三個展「ことはじめ」

貫く空間との対峙

永津禎三は本展のタイトルを「ことはじめ」とした。それは、いくつかの「ことはじめ」から成る、自身の画業を振り返ることの始まりでもある。

展覧会は、会場となるクリフガロの壁に一列に掛けられた8点の〈Box〉シリーズ（1983年）を機に、永津が初めてテンペラの技法で取り組んだ《楽土》（77年）、その翌年につくられた《堕天使》と《5枚の年賀状》、近年から手掛けている〈絵画としてのポシャギ〉シリーズの小品《Work 2019―1》（2019年）で構成されている。

モチーフから中世絵画の影響を感じさせる《楽土》は、オーストリア生まれの画家、フンデルトヴァッサーに影響を受け、限られた書物から独学で樹脂テンペラの技法を習得し、試行錯誤の上に仕上げた一枚である。本作が50年近く前に描かれた事実こそ、テンペラを選択した意図を裏付けている。

制作年が一気に飛び、永津が琉球大学の教員生活を終える手前に着手したのが、近作のポシャギである。海岸で拾った石を砕いた顔料で染めた布は、サイズの異なるグレーの濃淡の組み合わせによって一つの画面がつくられている。一見すると異なる印象を与えるこれらの作品群だが、いずれも永津の「絵画の空間性」への関心に基づいている。カンヴァスや箱、一枚の布にしても、一定の枠の中で画面をどう構成するか、それによってどのような視覚的効果が得られるか、その探究心が制作の根底にあるように思う。

画面上で展開される絵画の空間は、当然ながら現実の空間とは異なる。絵画の歴史において、遠近法など内部で完結した絵画空間だが、近代以降、表層と奥行きを介した知覚への働きかけを伴い、平面である絵画の二次元は、三次元である現実に接近してきている感じすらある。あくまで矩形の体裁を取りつつ、半ば立体の形状を持つ〈Box〉シリーズは、2・5次元の作品とは言えないだろうか。永津自身が「タブローになっていくフォルムの源泉」とし、絵具の代わりに箱に配置された品々は、その一つ一つが絵具と同様に画面を覆う重なりとなり、思考によって画面が形作られていく。箱という予め奥行きを伴った空間ではあるが、前後の関係より宙に浮かぶ配置に顕著だが、上下の秩序を無効にする手立てによって視覚の錯乱を促している。二次元に対し、三次元の見方を移し変える試みと言える視覚の変動は、その後の〈Utaki Series〉への前兆とも考えられる。

時を経て、場所が変わろうとも空間との対峙（たいじ）を可能にする一連の作品は、素材や技法は違っても「絵画」であり、永津の関心が一貫して変わらないことを示している。自らの理念に貫かれた絵画の在り方として、褪（あ）せることのない情景を目にするだろう。

（エデュケーター）

◇ ◇

永津禎三個展「ことはじめ」は20日まで、沖縄市高原のクリフガロで開催している。月～水曜は休み。

永津禎三の〈Box〉シリーズ

琉球新報 2024年10月11日